

天候に応じた細かな水管理で水温・地温の上昇を図り、分けつを促進させましょう！  
田植えから約1か月経過すると残草が見られる時期になります。発生に応じて、中後期除草剤を散布しましょう！

## 現在までの生育状況

管内生育観測圃 生育調査結果（6月10日調査）

田植え後の生育は、茎数は平年を下回り、草丈および葉齢はほぼ平年並みの状況です。  
今後も水管理には十分目を配り、分けつを促進させ、早期に茎数を確保しましょう。

品種	草丈 (cm)			茎数 (本/株)			葉齢 (葉)		
	本年	平年	前年	本年	平年	前年	本年	平年	前年
はれわたり	26.1	28.9	27.3	4.3	4.8	5.3	4.8	4.9	4.8
まっしぐら	30.5	30.2	27.4	4.5	5.0	5.0	4.9	5.1	5.1
青天の霹靂	29.3	31.9	28.4	4.5	5.4	4.8	4.8	5.2	5.0

はれわたりは2カ年の平年値

## 分けつ期から幼穂形成期までの管理

### 水管理

温暖な日は、2～3cm程度の浅水で水温の上昇を図りましょう。  
低温の日は、冠水しない程度の4～5cmの深水で保温に努めましょう。  
水は定期的に入れ換えましょう。土壌中の酸素が欠乏すると発根が進まず弱い稲体になります。

### 中干し

中干しは、茎数が20本程度になったら始めましょう。（6月下旬～7月初め頃から開始）  
中干しは、田面に軽く亀裂が入る程度実施しましょう。ただし、低温の日が続く場合や生育が遅れているところでは中干しをやめましょう。

### 幼穂形成期の水管理

幼穂形成期（幼穂が1.5mm程度になったとき：平年7月13日）からは、充実した花粉の数を増やすために、気温や天候に関係なく10日間は常に10cm前後の深水管理を行ないましょう。



## 病害虫防除

### 葉いもち病対策

低温・多雨、日照不足、窒素過多も発生の要因となります。予防による防除を基本としましょう。

薬剤名	使用量/10a	使用方法
オリブライト250（豆つぶ）	250g	昨年発生が多くみられた場合の予防として、中干し前に水深3～5cmの水が入った状態で散布し、散布後4～5日間は、湛水状態を保ちましょう。
ノンプラスDL粉剤	3～4kg	発生がみられたら、早めに散布しましょう。



葉いもち病

### イネドロオイムシ・イネミズゾウムシ防除

葉の食害が多くなると稲の生育が遅れるため、発生の多い水田では防除しましょう。

薬剤名	使用時期	使用量/10a	使用方法
なげこみトレボン	5葉期以降	容器4～6個	水田に容器のまま投げ込む。（容器が溶けて、中身の薬液が水田全体に広がります） 処理後3～4日間は湛水状態を保ち、処理後7日間は落水やかけ流しをしないで下さい。

オリブライト・ノンプラス・なげこみトレボンは、青天の霹靂（農薬節減米）には使用できませんので、ご注意ください。

### カメムシ対策

カメムシはイネ科雑草の実を吸汁するため、7月20日頃までは定期的に草刈りを行い、カメムシの密度低下に努めましょう。

## 雑草防除

塊茎（イモ）から発生する雑草は、長期間にわたって発生し、一発剤だけでは防除しきれない場合があります。塊茎は増殖し、来年の雑草の発生も多くなるため、雑草の種類に適した除草剤を早めに散布しましょう。

対象雑草	薬剤名	使用時期	使用量/10a	使用方法
ノビエのみ	トドメMF乳剤（200ml）	田植え後14日～ノビエ7葉まで（収穫50日前）	200ml（500倍）	水を落とした状態で散布。展着剤不要。 雑草にまんべんなく散布する必要があります。
	トドメ1キロ粒剤	田植え後14日～ノビエ5葉まで（収穫50日前）	1kg	湛水した状態で散布し、最低3日間は水深3～5cm程度を保ち、散布後7日間は落水やかけ流しをしないで下さい。
広葉雑草のみ	バサグラン液剤（500ml）	雑草の発生～増殖初期（田植え後15～55日、但し収穫50日前まで）	500ml（200倍）	水を落とした状態で散布。 雑草にまんべんなく散布する必要があります。
	バサグラン粒剤（3kg）	雑草の発生～増殖初期（田植え後15～55日、但し収穫60日前まで）	3～4kg	水を落とした状態で散布（足跡に水が残っている状態） 雑草が大きくなると効果が劣るので、その場合は液剤を散布して下さい。
広葉雑草とノビエの両方	トドメバスMF液剤（500ml）	田植え後15日～ノビエは6葉まで（収穫50日前）	1000ml（100倍）	水を落とした状態で散布。展着剤不要。 雑草にまんべんなく散布する必要があります。

青天の霹靂（農薬節減米）は、トドメ・バサグラン・トドメバス使用できます。

